

三日間に藩祖及び自家祖先の墳墓に詣でる。民間ではこの日正月以来の賃借を精算する。七月十五日。孟蘭盆中なるが故に、頭分以上の朔望の登城がない。

七月十六日。孟蘭盆の終りで今夕魂送を行ふ。天徳院に閻魔祭があり、民間では奉公人に敷入せしめる。

七月廿四日。城下養智院に地藏祭がある。

七月廿六日。二十六夜待の清興がある。

八月朔日。頭分以上朔望の登城を行ふ。民間では八朔と稱して田實の成熟を祝するが、特別の行事はない。

八月十五日。頭分以上朔望の登城を行ふ。所所に八幡祭がある。民間では今夕觀月をする。

八月廿八日。大乘寺で宗祖道元禪師忌を行ふ。

八月中。彼岸七日間に彼岸會があり、上丁の日には孔子祭を行ふものがある。

九月朔日。頭分以上朔望の登城を行ふ。今日から拾を着る。民間でも之に同じい。

九月九日。重陽の佳節だから、頭分以上登城祝賀する。今日から服紗小袖を着用し、足袋を穿つ。民間でも納入を着る。

九月十日。城下乾貞寺に秋葉祭がある。

九月十五日。頭分以上朔望の登城を行ふ。神明宮に日待の祭禮がある。

九月十八日。今夜から當月中天徳院門前に下馬の踊が催される。

九月十九日。所々に七面祭がある。

九月中。猿廻が多く城下に来る。

十月朔日。頭分以上朔望の登城を行ふ。知行取の土家では本納の朔日といひ、この日以後

殘餘半額の收納米を賣却することを得る。米仲買は本納相場を定める。十月二日。扶持米取の者に、十月から明年正月までの扶持米が支給せられる。

十月六日。今日から十五日まで、淨土宗寺院に十夜が行はれる。

十月十日。所々に金毘羅祭がある。

十月十二日。芭蕉忌が営まれる。

十月十三日。日蓮宗寺院に開祖忌を行ひ、御影講と稱する。

十月十五日。頭分以上朔望の登城を行ふ。

十月二十日。商家に夷子講を行ふ。

十月廿二日。今日より廿八日に至るまで、城下専光寺に親鸞上人に對する七晝夜の報恩講がある。

十月中。上亥の日に亥子餅を作る。上巳には城下誓願寺に辨財天祭がある。

十一月朔日。頭分以上朔望の登城を行ふ。

十一月八日。鍛冶等輪祭を行ふ。

十一月九日。大工・木挽等山祭を行ふ。

十一月十三日。塗師等粉糞祭を行ふ。

十一月十五日。頭分以上朔望の登城を行ふ。

十一月廿二日。今日より廿八日まで東西本願寺別院に宗祖の報恩講を行ふ。

十一月晦日。民間に宇賀祭を行ふ。

十一月中。中旬切米取の足輕に九月から十二月までの給米を興へる。是の月諸橋・波吉兩大夫の勳進能がある。冬至の日には醫師・藥種商が神農祭を行ふ。

十二月朔日。頭分以上朔望の登城を行ふ。民間に乙子餅を作つて、年中最終の月を祝する。

十二月八日。民間に針歲暮を行ふ。

十二月十五日。頭分以上朔望の登城を行ふ。

十二月十九日。城中の煤拂を行ふ。民間にてもこの頃から煤拂を初める。十二月廿五日。所々に年の市を開く。十二月廿八日。頭分以上歲暮祝儀の爲に登城を行ふ。

十二月晦日。前夕門松を立て注連飾を行ふ。今日民間に於いて孟蘭盆以後の賃借を精算し、年越の儀を行ふ。

ネンジョウジ 念乘寺 羽咋郡千浦に在つて、眞宗東派に屬する。

ネンダイテキヨウ 年代摘要 一册。一名加賀司農年代摘要。高澤忠順著。萬治元年から寛延元年までの改作所舊記を摘要して、編年に集成したもの。この書、實は改作所舊記即ち高澤録の總目錄であるといふが、彼は享保七年に終り、これはその後廿七年間のことを目錄風に擧げてゐる。

ネットウオレイ 年頭御禮 藩侯に對する藩末に近い頃の年頭拜賀は概ね左の如くであつた。

(一)元日―藩侯が元旦の朝餐終る時は、直垂のまゝ奥書院上段に着座し、大刀持の奥小將二人素襖を着して之に従ひ、家老二人布衣にて伺候し、奏者番素襖を着けて、諸大夫たる年寄衆の献上する太刀馬代を運ぶ。この時諸大夫は大紋直垂を着し、檜垣の間の廊下から順次一人宛下段に入つて拜禮し、表小將素襖に太刀馬代を引く。この馬代は銀馬代で銀一枚(四十三匁)、太刀代はその半額である。次いで諸大夫列座し、藩侯の指揮によつて表小將の運び来る鬘斗三方を頂戴し、後溜之間に退出する。之より鶴の庖丁があり、次いで藩侯小書院に着座し、叙爵しない年寄、及び家

老若年寄は布衣又は素襖で拜賀する。その献上する太刀馬代の折紙を置くべき位置と、拜禮者の着座する場所とは、身分に應じて嚴重の規定がある。次に藩侯大廣間上段に着座し、人持・定番馬廻組頭・馬廻組頭・小將組頭・組頭並・町奉行の拜賀を受ける。是等は一人宛出座し、太刀馬代を献上する。次に新番頭・歩頭・大組頭・持筒頭・持弓頭・金澤留守居番・先手物頭・物頭並・奥小將番頭・表小將番頭・大將番頭・定番馬廻番頭・組外番頭・使番・臺所奉行・細工奉行・奥小將横目・表小將横目・大小將横目等、左右から一人宛出座し、各鳥目百疋を献上する。この鳥目は紺色に染めた芋の錢纏に貫いたもので、之を御禮錢といふ。太刀馬代でも御禮錢でも、前年十二月中旬に、頭分以上は直接奏者所へ、平士は頭役を経て奏者所へ納めて置き、當日之を受取るのである。在江戸の士も亦目錄で献上し、奏者番代る代る之を披露し、大小將が引役の任に當る。次に藩侯は大廣間下段に着座し、大小將・射手小頭・異風小頭・射手・異風・新番小頭・三十人頭・新番・儒者・醫師・坊主頭・茶堂頭の拜賀を受ける。此の中、新番以上は大廣間三之間に、儒者以下は大廣間御勝手に列座し、各献上の鳥目を座前に置く。この時家老又は若年寄は襖を開き、奏者番は『何れも年頭の御禮申上げる』ことを披露し、終つて襖を閉ぢる。次いで御居間書院二之間に於いて近習頭支配の者及び奥小將、舟之間に於いて表小將等拜賀し、各奏者番の披露があつて、藩侯居室に入る。服装は頭分以上鬘斗目長袴、平士鬘斗目布上下、坊主頭・醫師は鬘斗目十徳、新番に於いて嫡子出身のものは鬘斗目布上下、嫡子以